



Title	話しことばの特徴
Author(s)	仲, 真紀子
Citation	読む書く話すの発達心理学, 内田伸子編著, (放送大学教材), ISBN: 459582162X, pp.106-112
Issue Date	1994-03
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/44816">http://hdl.handle.net/2115/44816</a>
Type	bookchapter
Note	11.
File Information	YKHS1994_106-112.pdf



[Instructions for use](#)

## 話しことばの特徴

話しことばは最も原初的な言語活動である。ここでは話しことば全般について、書きことばと比較しながらその特徴を考察する。話しことばに伴う身振り動作についてもふれる。

### 1. 話しことばの特徴

#### ●話しことばの制限

文字によるコミュニケーションと音声によるコミュニケーションの違いは何だろうか。最も大きな違いは、文字が時間的にも距離的にも大きな範囲で情報伝達できるのに対し、音声はとどく範囲が限られており、しかもその場限りで消えてしまうということである。この制限のために、特別の機器などを用いない、通常の音声によるコミュニケーションでは、情報の発信者と受け手は比較的近くにいることが必要となる。また伝達される情報量は、発信者と受け手が覚えておける量(メモなど外的な補助なしに記憶できる量)に限られることになる。

#### ●フィードバック

このような話しことばにおいては、フィードバックが重要な役割を果たす。発信された情報を受け取ったならば、受け手は発信者がもはやそのことに気がつかわなくてもすむよう、うなづいたり、返事をしたりして、その情報が伝わったことを示す。発信された情報が不十分であったり、発信された情報内容を受け手が聞きもらしてしまったりした場合は、受け手はげげんそうな顔をしたり、問い直したりして、情報が伝わっていないことを示す。フィードバックは話しことばの制限を補い、会話に

必要な情報処理の負荷を大きく軽減する。

## 2. 話しことばの分類

話しことばにおいては、受け手が存在しフィードバックを与えてくれることが重要である。実際、受け手もなく、したがってフィードバックもない話しことばはほとんど行われないうか、行われたとしても心理的な負荷が高い。このことを検討するために、受け手のあるなし、フィードバックのあるなしで話しことばを分類してみた。表11-1を見てほしい。

表11-1 話しことばの分類

受け手	フィードバックがある	フィードバックがない
誰もいない	—	ひとりごと 行動調整言語
いるかどうか不明	—	呼び声 案内放送
いる	会話	スピーチ 講義

### ●だれもいない場合の発話

受け手がいなくても生じる発話はある。「よし、やるぞ」とか、「これは、こうすればいいんだな」といった行動調整のための発話やひとりごとである。だが行動調整のための発話やひとりごとは、2～3歳の幼児では頻繁にあらわれるものの(これを自己中心語という)、やがて消失し、大人ではほとんど見られない。

### ●相手がいるかどうか不明な場合の発話

いるかいないか分からない相手に発話する場合には、発話に音程がつか

く傾向がある。「〇〇さん、いらっしゃいますかー」、「〇〇ちゃん、あーそびーましょー」などである。行商人の呼び声「いーしゃきーいもー」や「ものほしーさおだけー」のように、不特定多数に呼びかける場合にも音程がつくようである。エレベータ嬢の案内、バスガイドの説明、今ではあまり聞かれなくなった駅前のアジ演説などにも音程がつく。同じメッセージでも、相手が目の前にいれば音程はつかない。

どうして音程がつくのか。相手が聞いているかどうかわからないのに声を発するというのはそもそも不経済であり、無意味な行為である。これが有意義であるためには、発話はメッセージと「歌」という2重性をもたなければならないのかもしれない。また案内やバスガイドの説明のように、外的な支え(原稿やメモ)やフィードバックの助けなしに長い発話を行うには、メッセージを歌のようにして覚えるのが有効なのかもしれない<sup>1)</sup>。

#### ●受け手がいてもフィードバックが期待できない場合の発話

受け手が目の前にいるにもかかわらずフィードバックが期待できない発話の例としては、式典でのスピーチや演説、講演や学校での講義などが考えられるだろう。このような発話では、発信者は構造化された文章を順序よく、繰り返すことなく語らなくてはならない。いわば文章の音声化であり、認知的な負担はとても大きくなる。しばしば原稿が準備されるのはこのためであり、また実際、スピーチや演説は文章を暗記することによって行われることも多い。

#### ●受け手がいてフィードバックが期待できる場合の発話

フィードバックが期待できない話しことばは生じないか、生じたとしても話すのにかなりの努力を要する。これに対し、会話では即座にフィードバックが与えられ、発信者の負担は大きく軽減される。会話であれば2時間でも3時間でも続けることができる。会話は話しことばにもっと

も適したコミュニケーション形態であるといえよう。

### 3. 話しことばと動作

文字という純粋に言語的な表現手段によって媒介される書きことばとは異なり、話しことばは、音声言語にとどまらない身体全体の活動でもある。ここでは話しことばに伴う動作について見ていこう。

#### ●手の動き

話しことばは音声を主な媒体とするが、そればかりではない。話をするときには身体も動いている。マクニール (McNeil, D.)<sup>2)</sup> は次のような実験を行った。5人の被験者に短いアニメを見せ、後で内容を話してもらう。その様子を録画し、話しことばとともに生じる動作を分析するのである。その結果、表11-2のように、意味に対応した手の動きが被験者間で共通に見られることが分かった。また、(1)同じ手の動きでも、意味が異なる場合にはそれらを区別する別の動作が加わること (右手を上げる同じ動作が2度続いても、一方が「彼」を、他方が「彼の口」を示すようなときには、間に無関連な動きが挿入され、両者が区別される)、(2)複雑な意味はことばと動作の2つのモードで相補いながら表現されること (ことばで「追いかける」と述べ、「かさを振り回しながら」の部分を動作で示す)なども明らかになった。これらのことからマクニールは、動作は言語と同様、意味を担うシンボルとして機能すると述べている。

マクニールはさらに以下のような理由をあげて、動作とことばは共通の過程をもっているのではないかと考察している。

- 動作は話しことばの最中でのみ生じる。話の切れめでは生じない。
- 表11-2にも見られるように、動作は意味をにない、文脈に応じた語用論的な機能ももつ。
- 動作は節などの言語的な単位と同期して生じる。

- 失語症ではことばと同時に動作も消失する場合がある。
- 子どもではことばと動作がともに発達する。

表11-2 言語表現と手の動き<sup>2)</sup>

被験者A～Eの発話と手の動き。[ ]内は手の動きを示す。

- 
- A：排水管が上がって [手を上げ、上を指さす]  
 B：ビルの排水管をよじ登って [手を上げ、上を指さし始める]  
 C：そこで今度はパイプを登って [手を素速く上げ、手をバスケットのように開く]  
 D：今度は雨どいの中を上がろうとして [手は動かさず上を示す。それから指さしたまま手を素速く上げる]  
 E：雨水のタンクによじ登ろうとして [手の関節を上下に曲げる]
- 

●動きを禁じると

動作を禁じると、ことばは出にくくなる。フリックとグッテンタグ (Frick, D. J., & Guttentag, R. E.)<sup>3)</sup> は、単語の定義から単語をあてる課題(例えば「ピアノやオルガンの音を出すために指で押すところを何というか」など)を、次のような条件で被験者に与えた。一方の条件では被験者に両手で棒を握らせ、手の動きを禁止した。もうひとつの条件の被験者は、普通に手を動かすことができた。その結果、手の動きを禁じた群では成績が低くなった。

手の動きを禁止すると、考える過程(定義から答えを探し出す過程)が妨害されるのだろうか。それとも答えを声に出す過程が妨害されるのだろうか。フリックらは次の実験で、このことを検討している。まず両群の被験者にすべての課題を与え、あらかじめ答えを予想しておいてもらう。その後、一方の群は手の動きを禁止し、他方の群はそのままの状態ですべての課題を予想しておいてもらった答えを言ってもらう。この実験では禁止し

た群もしない群も成績に差はなかった。手の動きは声に出す過程ではなく、単語を探す過程を妨害するようである。

すでに紹介した母国語と外国語による会話実験<sup>4)</sup>のビデオテープを見直し、動作について調べたところ、英語で会話をするときには日本人の、日本語で会話をするときには留学生の手の動きが多かった。話しにくい言語のほうが動作が生じやすい。動作は話しことばを円滑にすると推察される。

### ●あいつち

聞き手がいてフィードバックを与えることができる状況では、聞き手による動作—うなづきやあいつち—も会話をスムーズに進行させるはたらきになる。次の例は、ラジオの対談番組の発話の一部である。( )は発話の受け手によるあいつちを示している。あいつちが発話のあらゆるところで、必ずしも意味の切れめに対応していないところでも生じていることがわかる<sup>5)</sup>。

「こう塔があって、(ソーソー)真ん中まではイスラムで建てて、勝ったから、そこからは(ソーソーソー)耶蘇教になってるちゅうね」

あいつちは、「了解した」というよりも「聞いている」ということを示すフィードバックとして機能しているようだ。

小林<sup>6)</sup>は、聞き手が話し手に対し普通にあいつちを打つ条件と、打たない条件とで、話し手の話しやすさを検討している。被験者に与えられた課題は絵を見て物語を作るというものであった。話したときの不安の程度や話しやすさ、満足度などを答えてもらったところ、あいつちのない条件では話し手の不安が高く、また話しやすさや満足度が低くなることが確認された。

もっとも、あいつちの打ち方には文化差があるように思う。例えば日米のテレビ番組を比較してみると、日本人の対談では、聞き手が話し手

の発話に頭を振ったりあいづちを打ったりすることが多い。これに対しアメリカ人の対談では、聞き手が話し手の発話に見しろぎもせずじっと聞き入るといような態度が見られる。このあたりの比較は今後の課題であり、興味深いところである。

●参考図書

マクニール, D. 鹿取廣人訳『マクニール心理言語学—「ことばと心」への新しいアプローチ』サイエンス社 (1990)

仲真紀子「会話」 内田伸子編著『新・児童心理学講座第6巻 言語機能の発達』(pp.149-182) 金子書房 (1990)